一八八一年アシャル月某日

スレンドラ邸に聖ラーマクリシュナの訪問

ラーム、マノモハン、トライローキャ、マヘンドラ・ゴースワミー等と共に

今日、聖ラーマクリシュナは信者たちと共にスレンドラの邸にいらっしゃった。一八八一年アシャル月の或る日、日の暮れかかる頃。

少し前、タクールはマノモハンの家でしばらく休んでおられた。

スレンドラ邸の二階の客間に信者たちは入った。マヘンドラ・ゴースワミー、ボラナート・パル等、近所の人たちが来ている。ケーシャブ・セン氏も見えることになっていたらしいが、何かの都合で来られなかった。ブラフマ協会からはトライローキャ・サニヤルと、ほかに数名来ていた。客間には白いシーツでおおわれたゴザが敷いてあり、その上に美しい敷物とクッションが置いてある。タクールをご案内してきて、スレンドラはその敷物の上に坐っていただくように申し上げた。

聖ラーマクリシュナは(豪華な敷物やクッションを見て)、「また、どうしてこんなことを……」とおっしゃりながらそこへは坐らず、マヘンドラ・ゴースワミーの隣にお坐りになった。ジャドウ・マ

リックの別荘での聖典の朗読会が終わるまで、聖ラーマクリシュナはいつもそこへ行っておられた。一通り読誦するのに数ヶ月続いた朗読会であった。（マヘンドラ・ゴースワミーも同席していた）

マヘンドラ・ゴースワミー「（信者たちに向かって）私はこの御方のそばで数ヶ月間、殆どの時間を過ごしました。こんな偉大な人に、私は今まで会ったことがない。この方のご境地は、普通の程度のものではありませんよ」

聖ラーマクリシュナ「（ゴースワミーに向かって）どうしてそんなこと言うんだい。わたしは皆のなかで、一番バカで貧しい人間だ。わたしは皆の下男の、その又使い走りだ。偉大なのはクリシュナだよ。

完全円満なサッチダーナンダこそクリシュナだ。遠くから見ると海の水は青く見えるが、近くに行けば色は無い。無相の御方が、あらゆる相（すがた）を具（そな）えていなさる。永遠不動（ニティヤ）の御方が、変化活動（リーラー）していなさるんだよ。

クリシュナは体を三ヶ所で曲げて[訳註]いるが、あれは何故だ？――ラーダーへの愛のためさ。

ブラフマンである御方がカーリー、つまり根元造化力（アディヤシャクティ）で、創造―維持―破壊をなさる。クリシュナ

（訳註）クリシュナは体の三ヶ所（首、腰、膝）を折り曲げた独特のポーズ（トリバンギ）をとるが、これはクリシュナを慕い愛する人々をクリシュナ自身も愛し、どうすればその人たちが幸せになるかという想い（愛）がクリシュナの体を曲げているとも言われる。この愛ゆえヴィシュヌ神の化身であるクリシュナは、〝愛の化身〟とも呼ばれる。

である御方がカーリーなんだ。
根は一つ――すべてがあの御方の遊戯(リーラー)なんだ」

〔あの御方に会うには――〕
「あの御方には会うことができるよ。純粋清浄な心、純粋清浄な知性で見られる。女と金に執着があると心が汚れる。
心次第だ。心は洗濯屋にある布のようなもの――染めたい色に染まるよ！　心で智識人にもなるし、心で無智のまま――。〝或る人が悪くなった〟ということは、つまり、その人の心が悪い色に染まった、ということさ」
トライローキャ・サニヤル氏と他のブラフマ協会の信者たちが来て坐った。
スレンドラが花輪を持ってきてタクールの首にかけようとした。タクールは花輪を手にとられて、そして傍にお投げになった。
スレンドラは目に涙をいっぱいためて、西のベランダに出て坐りこんだ。マノモハンとラームがついていった。スレンドラは誇(プライド)りを傷付けられてこう語った――「腹が立ったんですよ。ベンガルでも西の方の田舎(聖ラーマクリシュナの生誕地)に住むバラモンは、こういった品物の値打ちが分からないんですかねえ！　この花輪はずいぶん高かったんですよ。怒った声で私は〝花輪はみんなにくれてやる〟と言ってしまったんです。でも今、わかりました。私が間違っていたのです。至聖(かみ)はカネでは買われ

ない、傲慢な人間は神に近づけないんですね！　私は傲慢な人間です。そんな私の捧げ物など、どうして受け取られましょうか。あーあ、もう生きる希(のぞ)みもなくなった……」

こう言いながら涙をポロポロこぼし、胸まで濡らしていた。

一方、部屋の中ではトライローキャが歌っている。聖ラーマクリシュナは恍惚となって踊っていらっしゃる。さっき傍に投げ捨てた花輪をひろって首におかけになった。そして片手で一つの花輪をつかみ、もう一方の手で他の花輪を揺らせながら、歌い、かつ踊っておられる――

わたしの胸のだいじな宝――
（即興で）
他に何の宝が残っていよう
世界の月を身に着けたのだから――

スレンドラは喜びで有頂天――タクールがお首に、あの花輪をかけて踊っていらっしゃる！　彼は心の中で叫んだ――至聖(かみ)は虚飾高慢を打ちこわす御方だ。しかし、貧しく低い者たちにとっては無上の宝だ！

聖ラーマクリシュナはご自分でお歌いになる――

ハリの名呼んで涙を流す
　あの二人の兄弟が来たよ
打たれても蹴られても愛だけを返す
　あの二人の兄弟が来たよ
自分で酔っては世界を酔わす
　あの二人の兄弟が来たよ
賤民たちをやさしく胸に抱く
　あの二人の兄弟が来たよ
ヴラジャの野ではカナイとバライ
　あの二人の兄弟が来たよ

二人の兄弟――ガウル（チャイタニヤ）とニタイ（ニティヤーナンダ）

カナイ――クリシュナのこと、バライ――バララーム（クリシュナの兄）のこと。この歌はガウルとニタイをカナイとバライの再来としてうたっている

大勢の信者がタクールといっしょに踊っていた。キールタンが終わると坐って、また楽しい会話になった。聖ラーマクリシュナはスレンドラにおっしゃる――「わたしに、何か食べさしてくれないかい？」こうおっしゃって立ち上がり、奥の部屋に行かれた。婦人たちが進み出て、額（ぬか）ずいてタクールをうやうやしく礼拝した。

召し上がった後すこし休息されてから、南神村（ドッキネーショル）のお寺にお帰りになった。